

## 室鳩巢の中秋詩——盛唐詩の受容と儒臣像の形成

山本 嘉孝

### はじめに

漢詩制作の規範として盛唐詩を近世日本で最初に本格的に受容したのは、よく知られる荻生徂徠一門ではなく、木下順庵門下、すなわち木門であったことは、杉下元明氏が指摘された通りである。<sup>①</sup> 徂徠も「叙江若水詩」(『徂徠集』)〔元文五年(一七四〇)刊〕巻八)で「於是錦里夫子者出、而樽桑之詩皆唐矣。方今君美龍拳於東都、師礼虎視於北陸、林叟巋然於海西、伊鳥聯美於中州」(是に於いて錦里夫子なる者出づる有りて、樽桑の詩皆唐なり。方今君美東都に龍拳し、師礼北陸に虎視し、林叟海西に巋然として、伊鳥中州に聯美す)と記し、唐風の作詩は木下順庵から始まり、江戸の新井白石、加賀の室鳩巢など、順庵の門人らに受け継がれた、と認識していた。

木門で盛唐詩が喜ばれ、模倣されたことは確実であるが、それが何故であったかについては、まだ完全に明らかにされていない。杉下氏が、木門における盛唐詩受容の特質として挙げられたのは、「朱子学のもとにあっても古文辞的な詩の制作が可能であった」点であるが、<sup>②</sup> その具体的な様相については、調査・考察の余地が残されている。揖斐高氏も、林家や、木門の祇園南海における「朱子学的な性情論と、『詩経』の風雅の詩に対する尚古主義的な規範意識との結合」については述べられているものの、<sup>③</sup> 盛唐詩の受容については詳述されていないのである。

ただ、実のところ、木門全体を朱子学者として見做すのは、聊か問題である。徂徠門下の服部南郭は、順庵を「古学の祖」と位置付け、朱子学を批判した仁齋学や徂徠学の祖として位置づけた<sup>4</sup>。実際、木門を代表する儒者の一人である新井白石は、伊藤仁齋の朱子学批判を非難しつつも、「宋儒」にも「虚誕の説なきにしもあるまじ」と、朱子学・宋学にも欠点があることを認めた<sup>5</sup>。しかし、同じく木門の室鳩巢の場合は、晩年の随筆『駿台雑話』（享保十七年（一七三二）自序、寛延三年（一七五〇）刊）巻一「老学自叙」に「年四十にちかきころにもあらん、ふかく程朱の学、つひに易べからざる事をさとりて」とある記述に拠れば、四十歳の元禄十年（一六九七）頃から、迷いなく朱子学に随うようになった。

鳩巢による盛唐詩受容のあり方を中心に検討すれば、朱子学を基盤とした学問と、盛唐詩の愛好が、徂徠門下とは異なるかたちで、如何にして連関し得たかについて、理解を深めることができるのではないか。先に筆者は、鳩巢が盛唐詩を模倣して作った辺塞詩において、主君に忠誠を尽くす臣下の理想像が造形されたことを指摘した<sup>6</sup>。本稿では、鳩巢が正徳三年（一七二二）に参加した中秋の宴を機に制作した詩とその制作背景を検討し、鳩巢が如何なる観点から盛唐詩を享受したかを考察することで、徂徠門による盛唐詩称揚に先行した、木門における盛唐詩受容の一端を明らかにする。

## 一、中秋の月と李白・屈原

鳩巢は、『駿台雑話』巻五の「月は世々の形見」条で、中秋に詠むべき詩について論じている。鳩巢がいうには、単に月の外面の美しさを愛でるのは不十分であり、「ふかき感」ないし「千載無窮の感」を味わうような詩が望ましく、その模範として盛唐詩人、李白の七言古詩「把酒問月」（『古文真宝』前編巻中）を挙げる。「青天有月来幾時」（青天月有りて来幾時ぞ）と始まるこの詩について、鳩巢は「月の景気をすて、一気に古今を洞観して」と、情景描写を行わず、遠い過去から現在までの時の経過を深く洞察する点を評価し、「氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及べき事

がらにあらざ」と、李白が最上の詩人であることを強調する。

では、鳩巢のいう「ふかき感」とは何か。鳩巢の説明に拠れば、「翁が千載無窮の感と申すは、我儕古人をしたひて、其書をよみ、其心をしりつゝ、常に世をへたる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照して来て、今にあれば、古人の形見ともいふべし」とあるように、今も昔も変わらず世を照らし続ける月を見て、今や会うことのできない昔の人々、それも、書物を著すような心ある人々に、思いを寄せることである。確かに、李白の「把酒問月」には、「今人不見古時月、今月曾經照古人」（今人は古時の月を見ず、今月は曾て古人を照らすことを経）という聯が見える。

しかし鳩巢は、李白の詩を凌駕する詩賦がある、という。『楚辞』の「遠遊」である。特に「往者余弗及、来者吾不聞」（往く者は余及ばず、来る者は吾聞かず）の二句を取り上げ、「屈子一代に知己なきをかなしみて、古人は誠にわが心を得たれば、あはれ一度あうて語らでとおもへど、其世に及ばねばかなはず」と、屈原が同時代に理解者を得られないことを悲しみ、詩賦を作つて古人に思いを寄せたことに注目している。

鳩巢は、李白の詩には欠けるが、「遠遊」に備わるものとして、「後代を待の心」を挙げる。李白は過去のみに思いを寄せたが、屈原は過去に加え、未来にまで知己を求めた。鳩巢はその遠大な視点に感心している。「往者余弗及、来者吾不聞」直前の二句は、「惟天地之無窮兮、哀人生之長勤」（天地の無窮を惟ひ、人生の長勤を哀しむ）である。鳩巢が中秋の詩に求めた「ふかき感」ないし「千載無窮の感」とは、まさに「遠遊」のこの箇所に基づく情感であった。

そもそも「遠遊」の作者を屈原としたのは朱熹である。鳩巢も「遠遊」の作者を「屈子」すなわち屈原と見做しており、朱熹集註『楚辞』（慶安四年（一六五二）刊、『註解楚辞全集』所収、以下『楚辞集註』）を参照したと考えられる。同書巻五では「遠遊」の「惟天地・・・吾不聞」四句に、朱熹の注が左の通り付されている。

此章四言乃此篇所以作之本意也。夫神仙度世之説、無是理而不可期也審矣。屈子於此乃独眷眷而不忘者何哉。正以往者

之不可及、来者之不得聞、而欲久生以俟之耳。（此の章の四言は乃ち此の篇之を作る所以の本意なり。夫れ神仙世を度るの説、是の理無くして期すべからざることを審かなり。屈子此に於いて乃ち独り眷眷として忘れざるは何ぞや。正に往く者の及ぶべからず、来る者の聞くことを得ざるを以て、而して久しく生きて以て之を俟たんと欲するのみ。）

朱熹は、この四句に「遠遊」の主意が込められているとし、屈原は、過去や未来に思いを馳せることによつて、「神仙度世」、すなわち神仙となり世俗を超越する願望を満たそうとした、との解釈を示す。不死身の仙人になれば、未来の時代まで生き延びて知己を得ることが出来る。未来に思いを馳せるというのは、神仙になろうとすることと同じである。実際、「遠遊」には「焉託乘而上浮」（焉くにか託乗して上浮せん）といった句に、仙人となり昇天したい、との願望が表わされている。

実は、李白「把酒問月」にも神仙との関連が見られる。そもそも月は仙界になぞらえられることが多いが、この詩でも、「皎如飛鏡臨丹闕」（皎として飛鏡の丹闕に臨むが如く）の句で、月が仙人の住処を想わせる朱塗りの宮門（「丹闕」）に差し掛かった空飛ぶ鏡に喩えられている。

鳩巢が中秋の名月に因んで、李白と屈原の「ふかき感」を称賛したことの根底には、朱熹の「遠遊」論があったと思われる。鳩巢の李白「把酒問月」理解に、朱熹『楚辭集註』が作用していた、とも換言できる。一見、遠く離れているかのような盛唐詩と朱子学を繋ぐもの一つに、『楚辭』が挙げられるのである。『楚辭』「漁父」に典拠のある「滄浪」を別号としたことから、鳩巢が『楚辭』をよく学んだことは窺えるが、李白と『楚辭』の関連に、早くから鳩巢が注目していたことは、正徳三年（一七一三）、江戸は飯田町の新井白石宅で開かれた中秋の宴を機に作られた一連の詩において、窺い知ることが出来る。

## 二、正徳三年の中秋の宴

鳩巢が加賀の門人、青地兼山に宛てた正徳三年八月二十三日付の書簡（『兼山秘策』、『日本経済叢書』巻二、二六三頁）には、同年八月十五日、鳩巢が昼から深夜まで白石宅で過ごしたことが記されている。翌十六日が娘の命日に当たするため、通常、十五夜はどこにも出掛けないが、白石宅で宴会があるのは珍しいことなので行つた、とある。白石は二十年来、目薬「五靈膏」の製造販売で成功を収めた富裕な薬種屋、益田助右衛門（号は鶴楼）の家で開催される中秋の宴に招かれていたが、「一両年は酒食を新井氏宅へ持参致し候。当年も右助右衛門亭主にて候」とあるように、鶴楼は一、二年前から酒食を白石宅に手配し、そこで宴を主催していた。

この正徳三年の中秋の宴では、飲み食いだけでなく、漢詩の制作も行われた。鳩巢は「新井氏即席の作始て見申候て驚申候」と記し、白石が即興で作つた詩の見事な出来映えに感心している。また「私作も作り捨てに仕留置不申候。尤いづれも見所無之詩に候へば、取集候て此度其元へ進申候に不及候」とあるように、鳩巢自身も詩を作つたが、どれも上手くないので兼山には送らない、と記している。

宴の酒食を提供した益田鶴楼は、白石の唯一の作詩の門人であつた。服部南郭「鶴楼伝」（『南郭先生文集』三編〔延享二年（一七四五）刊〕巻七、及び『鶴楼遺編』（宝暦十二年（一七六二）刊）所収）には、「少壮事白石先生、以詩称高第弟子」（少壮より白石先生に事へ、詩を以て高第の弟子と称す）とあり、白石が鶴楼の他には詩の門人を採らなかつたことについて、次のように記されている。

白石先生詩名海内数十年矣。然其人固志経世略、恥以詩名家。且自視高、不妄仮人、率不欲人以弟子受詩。以故登其門至寡矣。而鶴楼独以詩見奇愛於白石先生。（白石先生海内に詩名あること数十年。然れども其の人固より経世の略に志

し、詩を以て名家たることを恥づ。且つ自ら視ること高くして、妄りに人に仮さず、率ね人の弟子を以て詩を受くることを欲せず。故を以て其の門に登るもの至つて寡し。而るに鶴楼独り詩を以て白石先生に奇とし愛せらる。(一)

白石は当代日本屈指の詩人として名声を得ていたが、経世家を自任し、詩の名家として知られることを恥じた。門人を集めて詩を教授することもしなかつたが、鶴楼は例外的に可愛がられた。またこの伝には、「鶴楼以詩与吾党鳴帰徳、高子式交善」(鶴楼詩を以て吾が党の鳴帰徳、高子式と交はり善し)と、鶴楼が詩を通して徂徠一派の成島信遍・高野蘭亭と交流が深かつたことが記されており、木門と徂徠門の両方に詩を媒介として人脈を持っていたことが分かる。ともかくこのような人物であつた鶴楼の催した宴で、作詩が行われたのは必然であつた。

白石の詩集には、白石がこの宴に際して作つた詩が収められている。「癸巳中秋小集」(『白石先生余稿』(享保二十年(一七三五)刊)卷二)と題された五言律詩で、鳩巢が称賛した「即席」の詩である可能性が高い。癸巳は正徳三年である。

詩題注には「自注云、是夕会者、滄浪、天漪、観瀾、新川、鶴楼、蠡湖等十数輩」とあり、宴に集つた者として、鳩巢、深見玄岱、三宅観瀾、土肥霞洲、鶴楼、都築随庵の名が挙げられる。鶴楼以外は全員、木下順庵の門人であり、且つ江戸幕府に仕える儒臣であつた。その詩を左に掲げる。

新井白石「癸巳中秋小集」

二十二年秋 二十二年の秋

年年醉鶴楼 年年鶴楼に酔ふ

梅花江上笛 梅花 江上の笛

桂樹淮南謳 桂樹 淮南の謳

不恨催衰老 恨みず 衰老を催すことを

何妨及勝遊 何ぞ妨げん 勝遊に及ぶことを

幸将今夕月 幸ひに今夕の月を将て

更喜故人留 更に喜ぶ 故人の留まることを

首聯は、鶴樓主催の中秋の宴が二十二年続いていることをいう。鳩巢の書簡と合致する内容である。頸聯・尾聯は、同門の親友たちが老いゆく身になっても、名月の下、一堂に会することができたのを喜ぶ。これらの聯は比較的平易で意味の把握に難は無い。

他方、頸聯は若干の分析と考察を要する。まず「梅花」の語は、文字通り梅の花を指すのではない。李白の七言絶句「与史郎中欽聴黄鶴楼上吹笛」〔唐詩訓解〕〔近世初期刊〕卷七の後半には「黄鶴楼中吹玉笛、江城五月落梅花」(黄鶴楼中玉笛を吹く、江城五月落梅花)とある(傍線は白石の作と共通する字に付す)。木門でよく参照された『唐詩訓解』所載の注には、「楽府解題、梅花落笛中曲也」(楽府解題に、梅花落は笛中の曲なり)と、「梅花落」が笛の曲名であることが解説されている。白石のいう「梅花」は、李白のこの詩に登場する、黄鶴楼で吹かれた笛の曲への言及であり、なぜ「黄鶴楼」といえば、第二句の「鶴楼」、すなわち益田鶴楼の号から連想されたのである。

また「江上」の語は、崔顥「黄鶴楼」〔唐詩訓解〕卷五の第八句「煙波江上使人愁」(煙波江上人をして愁へしむ)にも用例が見られ、黄鶴楼の縁語である。なお『唐詩訓解』には、この詩の注に「此篇太白所推服」(此の篇太白的推服する所なり)という顧華玉の言が引かれており、李白を感服させた詩とされている。黄鶴楼は、李白と関連深い場所でもある。

白石の第四句「桂樹淮南謳」では、『楚辞』を踏まえた李白の詩が意識されている。李白の五言律詩「寄淮南友人」〔分

類補註／李太白詩』〔宝永七年（一七一〇）刊〕卷十三の尾聯には、「復作淮南客、因逢桂樹留」（復た淮南の客と作りて、因つて桂樹に逢ひて留まる）とあり、白石は「淮南」と「桂樹」の語を再利用したと考えられる。更に「留」の字も第八句の韻字に用いている。『分類補註／李太白詩』所載の注には、「淮南王安賓客号小山。作招隱士曰、桂樹叢生兮山之幽。又曰、攀援桂枝兮聊淹留」（淮南王安の賓客、小山と号す。招隱士を作りて曰く、桂樹山の幽きに叢まり生ふ。又た曰く、桂枝を攀ち援いて聊か淹留す）とあり、李白のこの二句が、『楚辞』「招隱士」に基づくことが説明されている。

『楚辞集註』卷八所載「招隱士」の朱熹註には、「再言攀援桂枝、聊淹留者、明原未有帰意、不可得而招也」（再び言ふ、桂枝を攀ち援いて、聊か淹留するは、原未だ帰る意有らず、得て招くべからざることを明らかにするなり）とあり、山中に隠れている屈原を呼び返そうとしても、桂樹の枝を引き寄せて、山中に留まったままだ、という内容を言い表すとして解釈されている。桂樹は月に生えるとされるが、「招隱士」では、屈原が隠れていた山中に密生していたことになっている。

李白「寄淮南友人」では、「招隱士」の作者が淮南王の賓客であったことに因み、この世の俗事から離れて桂樹が生える地に赴き、そこに留まりたいものだ、と淮南にいる友人に呼びかける。翻つて白石は李白のこの詩を利用して、桂樹が生えるという月のもとで、旧友たちが集ったことの喜ばしさを表現したのである。

よつて白石の詩の顎聯は、鶴楼と月に因む李白の詩句を巧みに引用・再利用することで作られている。白石宅は隅田川に面しておらず、「江上」にあつたとはいえない。「淮南」も遠い唐土の地名である。これらの語はそれぞれ、実景とは直接関係のない、黄鶴楼と月の縁語として扱われるべきである。しかし、白石の顎聯は、修辭的な美辭麗句に過ぎず、そこに特段の深い意味はない、と見做すのは速断であろう。李白や屈原への言及に、「ふかき感」を読み取ることにはできないのである。幸い、鳩巢が、この白石の詩を読んだ感想を詩に詠んでいる。それが次節で取り上げる五首連作である。



三、鳩巢の五首連作

鳩巢は、白石「癸巳中秋小集」の読後感を「観白石中秋詩有感五首」（『鳩巢先生文集』後編〔宝暦十三年（一七六三）刊〕卷二）と題された七言絶句の五首連作で表現した。全五首、並びに最終首に付された自注を左に掲げる。

室鳩巢「観白石中秋詩有感五首」

〔其一〕

鳳蕭縹渺上遙空	鳳蕭縹渺として遙空に上り
万雉城頭月正中	万雉 城頭 月正に中る
応是泰平無闕事	応に是れ泰平 闕事無かるべし
徒教豪傑弄雕虫	徒らに豪傑をして雕虫を弄ばしむ

〔其二〕

金波蕩漾大江秋	金波蕩漾として大江秋なり
甲第連雲樂五侯	甲第雲に連なり五侯を楽しましむ
独有井家今夜宴	独り井家今夜宴有り
年年猶為布衣遊	年年猶ほ布衣の遊を為す

〔其三〕

白石楼頭月不孤	白石楼頭月孤ならず
風流文彩与秋俱	風流文彩秋と俱にす

樽前病起尚能賦 樽前 病より起きて尚ほ能く賦す

応似相如為大夫 応に相如の大夫為るに似たるべし

## 〔其四〕

一自逢迎咫尺親 一たび逢迎するより咫尺親し

悔將詞藻待斯人 悔ゆらくは詞藻を將つて斯の人を待つことを

目迷文彩梅花賦 目は文彩に迷ふ 梅花の賦

誰識李唐骨鯁臣 誰か識らん李唐骨鯁の臣

## 〔其五〕

一醉鶴樓二十年 一に鶴樓に酔ふこと二十年

旧時人物自依然 旧時の人物自ら依然たり

近来風義多零落 近来風義多く零落す

珍重汪倫識謫仙 珍重す 汪倫謫仙を識ることを

〔注〕白石詩有年年醉鶴樓句。鶴樓是田生号、乃里中識白石者。每至中秋設宴邀飲。于今二十二年。以為故事云。（白石の詩に「年年鶴樓に酔ふ」の句有り。鶴樓は是れ田生の号、乃ち里中に白石を識る者なり。中秋に至る毎に宴を設け邀飲す。今に于いて二十二年なり。以て故事と為すと云ふ。）

注に「年年醉鶴樓」の句が引用されることから、詩題にある「白石中秋詩」が、具体的には「癸巳中秋小集」を指すことが分かる。鳩巢がこれら五首をいつ制作したかは不詳だが、第二首に「今夜」とあるのを素直に受け取れば、宴の席で作られた可能性も留保される。たとい後日の作であったとしても、それほど日数が経たない内に作られたと見てよいであろう。

また、後に考察するように、白石はこの五首に次韻した「和滄浪見余詩有感作五首」（『白石余稿』卷二）を作っており、鳩巢がこの五首を白石に見せたことも分かる。

鳩巢の連作を見渡すと、第一・二首は白石宅で開かれた中秋の宴について詠み、第三～五首は特に白石一人に焦点を絞っている。

第一首は太平の世を寿ぎ、無事であるからこそ「豪傑」が作詩など、取るに足らぬ技芸に興ずることができるのだという。

第二首は、月が照らす中、白石宅で宴が開かれていることをいう。「大江」の語でも示唆されるように、場所は江戸であるから、「五侯」の「甲第」は諸藩の大名屋敷であろうか。邸宅に住まう武家に対し、鳩巢たちは公儀に仕える身とはいえ、儒者に過ぎず（鶴楼は町人である）、「布衣」すなわち武家ではない無官の身であるとの自意識が窺える。後述するように、「布衣」は、無官の身から拔擢され朝廷に仕官することとも関連する語としても注目される。

第三首は、杜甫の七言律詩「又作此奉衛王」（『杜少陵先生詩分類集註』（明曆二年（一六五六）刊）卷二十三・七言律・樓閣類）の尾聯「白頭受簡焉能賦、愧似相如為大夫」（白頭簡を受けて焉くんぞ能く賦せん、愧づらくは相如が大夫と為るに似ることを）を再利用し、白石を司馬相如に比している。この杜甫の詩は、右に挙げた和刻本で「樓閣類」に分類され、楼について詠んでおり、鶴楼や黄鶴楼に縁がある詩としても意識されたのであろう。杜甫は、老ぼれた自分を指して、詩箋を渡されてもたちどころに詩を作れず、司馬相如に比されるのが恥ずかしい、という。鳩巢はこれを転換させて、白石が年老いてもなお司馬相如のように詩賦に長けていることを称える。これによっても、白石の「癸巳中秋小集」が、例の即興の作であったことが想像される。なお杜甫の詩には、第六句に「曳裾終日盛文儒」（裾を曳きて終日文儒盛んなり）とあり、文才をもって拔擢された文臣・儒臣たちの多かった漢代や唐代の朝廷の様子を彷彿させる。司馬相如は文才を買われて武帝に仕えたが、白石も家宣に拔擢された身であり、先述した通り、宴に集った面々も、やはり民間から拔擢されて幕府に仕え

る身であった。

第四首でも、鳩巢は白石を朝廷に仕える文臣に比す。「骨鯁之臣」は韓愈「争臣論」(『唐韓昌黎集』(万治三年(一六六〇)刊)卷十四、及び『文章軌範』(正徳五年(一七一五)刊)卷二、後者は「諍臣論」に作る)の左の引用箇所に見える語である。

夫陽子本以布衣隱於蓬蒿之下。主上嘉其行誼、擢在此位。官以諫為名。誠宜有以奉其職、使四方後代、知朝廷有直言骨鯁之臣、天子有不僭賞、從諫如流之美。(夫れ陽子は本より布衣を以て蓬蒿の下に隠る。主上其の行誼を嘉して、擢でて此の位に在り。官は諫を以て名と為す。誠に宜しく以て其の職を奉ずる有りて、四方後代をして、朝廷に直言骨鯁の臣有りて、天子に僭賞せず諫に従ふこと流る、が如きの美有ることを知らしむべし。)

「布衣」すなわち無官であった陽城は、品行の正しさによって、皇帝に抜擢され、諫議大夫として唐朝に仕官することになった。陽城は職によく励み、皇帝に直言することを恐れず、また皇帝も、その直言に耳を傾ける度量を持っておられることを広く知らせるべきだ、と韓愈は記す。鳩巢は、白石を陽城に比し、美しい詩賦を作る姿からは、阿らずに主君に見てきたる剛直な諫臣であることなど誰が想像しようか、という。したがって、鳩巢は第二・三・四首で、白石を「布衣」から朝廷の職に抜擢された漢・唐の文臣に比している。それは続く第五首でも同じである。

第五首には「汪倫」と「謫仙」が登場する。汪倫は、李白に酒をふるまった友人で、李白「贈汪倫」(『分類補註／李太白詩』卷十二)に「桃花潭水深千尺、不及汪倫送我情」(桃花潭水深きこと千尺、汪倫が我を送る情に及ばず)と詠まれるように、李白と深い友情で結ばれていた。「謫仙」とは仙界を追われてこの世に現れた仙人を意味し、杜甫「寄李白」(『古文真宝』前編卷上)に「昔年有狂客、号爾謫仙人」(昔年狂客有り、爾を謫仙人と号す)とあるように、李白の別名である。

鳩巢は、白石を李白に、また鶴樓を汪倫に比しているのである。

第三句の「近来風義多零落」（近来風義多く零落す）は、李白の五言古詩「答高山人兼呈權顧二侯」（『分類補註／李太白詩』卷十九）の「風義未だ淪替せず」（風義未だ淪替せず）に基づく。この詩には、「謬揮紫泥詔、獻納青雲際。讒惑英主心、恩疎佞臣計」（謬つて紫泥の詔を揮ひて、獻納す青雲の際。英主の心を讒惑して、恩は佞臣の計に疎し）の二聯が示す通り、皇帝に拔擢された李白が、翰林供奉として朝廷に仕官したが、邪悪な臣下に陥れられたせいで、皇帝の寵愛を失ってしまった経緯が詠み込まれている。

その後、李白は朝廷を去るが、李白はそのことを「登艤望遠水、忽見滄浪柵」（艤に登つて遠水を望めば、忽ち滄浪の柵を見る）と、『楚辭』「漁父」に言及し、自身を放逐された屈原に比する形で表現している。その失意の中で出会った「高山人」は、「衣貌本淳古、文章多佳麗。延引故鄉人、風義未淪替」（衣貌本より淳古、文章佳麗多し。故郷の人を延き引きて、風義未だ淪替せず）と形容され、身なりが純朴・高潔で学識があり、同郷の人との友情を大切にして徳義を守る人であった。低俗な臣下がのさばる朝廷を逃れてきて、優れた人物との出会いに慰められた様子が伝わってくる。

李陽冰「唐翰林李太白詩序」（『分類補註／李太白詩』首卷）では、「布衣」から拔擢され、讒言を受けた後に「謫仙人」と呼ばれた李白の略伝が記されている。煩を厭わず該当箇所を引用する。

天寶中皇祖下詔徵就金馬。降輦步迎如見綺皓。以七宝牀賜食御手調羹以飯之謂曰、卿是布衣名為朕知。非素蓄道義、何以及此。置於金鑾殿、出入翰林中、問以國政。潛草詔誥、人無知者。醜正同列、害能成謗、格言不入。帝用疏之。公乃浪跡縱酒以自昏穢。詠歌之際屢稱東山。又与賀知章崔宗之等自為八仙之遊、謂公謫仙人。朝列賦謫仙之歌凡數百首、多言公之不得意。天子知其不可留乃賜金帛之。天寶中皇祖詔を下されて徵されて金馬に就く。輦を降つて歩迎すること綺皓を見るが如し。七宝の牀を以て食を賜ひ御手に羹を調へて以て之に飯らはして謂ひて曰く、卿は是れ布衣なれども

名朕が為に知らる。素より道義を蓄ふるに非ずんば、何を以てか此に及ばん、と。金鑾殿に置かれ、翰林の中に出入して、問ふに国政を以てす。潜かに詔誥を草して、人知る者無し。醜正の同列、能を害し謗りを成して、格言入らず。帝用ひて之を疏んず。公乃ち跡を浪りにし酒を縦にして以て自ら昏穢す。詠歌の際屢東山を称す。又た賀知章、崔宗之等と自ら八仙の遊を為すに、公を謫仙人と謂ふ。朝列謫仙の歌を賦すること凡べて数百首、多くは公の意を得ざることを言ふ。天子其の留むべからざるを知つて乃ち金を賜ひて之を帰す。

この箇所の大意は次の通りである。天宝年間、皇帝の玄宗が李白を翰林供奉に採用した際、「朕の耳に無官のそなたの評判が入ったのは、普段から道義に優れていたからだ」と語った。もとより無官であった李白は、「国政」について皇帝の諮問を受け、皇帝のために文書を起草するような重職に大抜擢されたのであった。しかし、正義を嫌う同僚から言われなき誹謗を受け、皇帝は李白の建言を遠ざけるようになった。落胆した李白は、酒を飲んで詩を作り、賀知章や崔宗之たちと、いわゆる「飲中八仙」の交わりを持って、「謫仙人」と呼ばれた。数百首にも上るこの時期の李白の詩は、その多くが「意を得ざること」、すなわち自身の失意ないし不遇について詠んだものである。玄宗は李白がもはや朝廷に留まらないことを悟り、金をやって放った。

以上を踏まえると、鳩巢の第五首は、同僚の讒言を受け、皇帝の寵愛を失って失意の中にいる李白に、白石を比している。李白の詩では、「風義」の語が、高山人の優れた人格との関連で用いられているが、鳩巢の詩では、原詩の「未淪替」（衰えていない）を真逆の意味に反転させて「多零落」（多分に衰えている）といい、近ごろ品德を欠く者が増えたことを示唆する。だからこそ、同門の旧情や鶴楼の友情が大変貴重に思えたのである。では、そのころ、白石の身边では、一体何が起きていたのか。

#### 四、家宣の死

白石が致仕したのは享保元年（一七一六）で、正徳三年（一七一三）中秋の時点ではまだ幕府に仕えていた。しかし、その約一年前、白石を失意に陥れた出来事があった。主君家宣の死である。

家宣は正徳二年（一七一二）十月十四日に薨去した<sup>⑦</sup>。白石の自伝『折たく柴の記』巻下では、その直後の白石の心境が次のように思い返されている<sup>⑧</sup>。

此年比我仕まいらせし所も、上の待たせ給ひし所も、よのつねの人にたぐふべからず。されば、我心に思ふ所は申さずといふ事もなく、上もまた我申す所御心を用ひられずといふ事もおはしませず。上すでになくならせ給はむ後は、我たとひいふ事ありとも、誰かはまたこれをきくべき。さきに、「我つかへのみちも今を限りとなりぬ」と申せしは、此事のためにてありき。されど、「世のため、人のため、深く遠く謀らせ給ひし所のいまだ行はせ給ふに及ばで、かくれさせ給ふ御きはまでも、承りにし御事共は、我いかにも、其御志のほどの行はれん事をおもひはかるべし」との御事とこそ覚ゆれ。

「上」は將軍家宣を指す。白石は思うところを余さず家宣に直言し、家宣も白石の諫言を受け容れた。しかし、家宣が亡き後、白石の意見を聞く人はいなくなつた。儒臣としての白石の役目は終わったかのように思われた。とはいえ、家宣の遺志を継ぎ、生前に企図した政策が実行されるように働こう、と白石は決心したのである。

家宣の歿後、白石の諫臣としての立場が崩れていった様子は、『折たく柴の記』巻下に克明に記されている。家宣の存命中、白石の意見はよく幕政に反映されたが、正徳三年三月に白石が行つた建議（「白石建議」第一〜三、『新井白石全集』第

六卷所収)は、老中たちによってことごとく却下された。また家宣に疎んぜられていた大学頭の林鳳岡が存在感を増している、白石と烈しく意見がぶつかることが増えた。白石の建議か却下されたのと同じ時期に、鳳岡が「正徳」元号の制定をめぐって白石を執拗に批判したことについて、白石は「例の曲学阿世の故智によりて、ふたゝび時にあふべき事をこひねがふ姦計に出しとぞみえたる」と、鳳岡が自分を陥れて、の上がろうと悪だくみをしたのであろう、と苦々しく思い出している。

更に、白石は正徳三年五月ごろの実感として、「我よくしろしめされし御事のなくなり給はむ後には、我言の行はれざらむは、去年の九月廿七日より思まうけぬ」と思い返して記している。病状の悪化した家宣が死期を悟り、後継ぎについて白石らに相談した正徳二年九月二十七日の時点から、自分の意見が、家宣の亡き後は、幕政に反映されなくなるであろうことを察知していたのだ、という。

よって、鳩巢の詩にあった「李唐骨鯁の臣」は家宣が存命中に盛んに直言した白石、「謫仙」は家宣歿後の失意の白石の姿であるといえる。「風義」の典拠である李白の詩(「答高山人兼呈権顧二侯」)にある「佞臣」は、白石から見た林鳳岡の姿と重なり合う。李白の場合、「佞臣」が讒言したのは玄宗の存命中で、白石の場合は、家宣歿後のことではあるが、家宣の遺志を思うように実現できない状況に置かれたという点では、主君の恩沢から遠ざけられた李白と類似した境遇にあった。家宣の後を継いだ家継は、家宣の子であったとはいえず、わずか五歳であり、白石のよき同僚であった間部詮房も、実権を失った。結果、誰も白石の意見に耳を傾けなくなった。鳩巢のいう「風義」の「零落」は、このような直近一年間の現実を暗示した表現として理解されるのである。

放逐された屈原に自らの身の上を重ね合わせた李白の姿に、更に白石の境遇を重ね合わせたのは、鳩巢だけでなく、白石自身でもあった。あらためて白石「癸巳中秋小集」の顎聯、「梅花江上笛、桂樹淮南謳」を検討しよう。「江上」の語に注目すると、李白の作に「江上吟」(『唐詩訓解』巻二)と題された七言古詩があることが思い出される。舟に乗り、「玉簫金



管」、すなわち金玉で飾られた簫や笛が奏でられる中、豪快に「美酒」を飲み、詩を作る李白自身の姿が描かれる詩だが、第七・八句は「屈平詞賦懸日月、楚王台榭空山丘」（屈平が詞賦は日月を懸け、楚王の台榭は空しく山丘）と、屈原の詩が太陽や月と並んで今もお光り輝くのに対し、楚王の立派な楼閣は今や跡形も無くなっていることをいう。「楚王」は屈原の主君、懷王で、屈原の諫言に耳を傾けなかったがために、秦に敗れて滅亡した。一方、自身の意見を聞き入れられなかった屈原は、絶望して入水自殺した。李白がここで屈原と楚王に言及する理由については、『唐詩訓解』注にある左の記述が参考になる。

因思屈平尽忠於君、作離騷以諷諫。其文堪与日月争光。然而王危国削無補於楚。我又何必眷眷于朝廷乎。惟以詩酒自娛耳。（因つて思ふ、屈平、忠を君に尽くし、離騷を作りて以て諷諫す。其の文日月と光を争ふに堪ふ。然り而して王危ふく国削られ楚に補無し。我又た何ぞ必ずしも朝廷に眷眷たらんや。惟だ詩酒を以て自ら娛しむのみ。）

屈原は主君の懷王に忠誠を尽くし、「離騷」を作つて諫言した。しかし楚は滅ぼされ、屈原の諫言は役に立たなかった。そこで李白は、屈原のように思い詰めて死を選ぶのではなく、むしろ詩と酒を楽しむことによつて、朝廷のことで齷齪するのをやめた、とある。

白石は、家宣への忠誠を捨てなかったが、李白同様、生きて詩と酒を楽しむことを選んだ。白石の対句「梅花江上笛、桂樹淮南謳」は、月と鶴楼を巧みに詠み込んだ言葉遊びであるのに加え、家宣の薨去後をはじめての中秋の宴で詩酒を楽しむ自身の境遇を、朝廷を去つた後、「江上吟」を詠み、屈原を想いながら詩を作つた李白に重ね合わせるといふ、深い洞察をも含んでいる。鳩巢はこの意を十分に汲んだ上で、自身の五首を連作したと考えられる。

また鳩巢の第三首の第四句に用いられる「病起」の二字は、杜甫「寄李白」（『古文真宝』前編卷上）の「老吟秋月下、病

起「暮江浜」(老いて吟ず秋月の下、病より起く暮江の浜)を踏まえる。年老いた李白が、秋の月のもとで詩を作り、河のほとりで病から恢復する様子を杜甫が想像する箇所である。この李白は、皇帝の拔擢、朝廷への仕官、そして皇帝の寵愛の喪失を経た、年老いた詩人であり、中秋の月を眺めながら詩を作る、失意の白石の姿と重なる。

ただし、白石や鳩巢たちが、悲嘆に暮れていたかという点、そうとも思われない。旧友たちと詩酒を楽しみながら永世を照らす月を眺め、李白や屈原に思いを致した時、公儀に仕える儒臣として守るべき高潔な矜持が補強され、心が奮い立ったのではない。また、正徳三年中秋に、古人を思い、「一氣に古今を洞観」する詩を応酬した実体験が、本稿冒頭で確認した詩の「ふかき感」をめぐる鳩巢の議論に、少なからず影響した可能性も皆無ではなからう。

## 五、白石の次韻

白石は、前節で見た鳩巢の五首連作に次韻して、「和滄浪見余詩有感作五首」(『白石余稿』卷二)を作った。第一・四首の第一句を除き、全て鳩巢と同じ韻字を用いる。左に全五首を掲げる。

### 新井白石「和滄浪見余詩有感作五首」

〔其一〕

梁園授簡尽才雄 梁園 簡を授かるは尽く才雄

上客相如意氣中 上客の相如 意気の中

豈料茂陵多病日 豈に料らんや 茂陵 多病の日

秋深四壁聽鳴虫 秋深くして四壁に鳴虫を聴くとは

〔其二〕

孤劍霜吹兩鬢秋  
拋鞍何復為封侯  
老來辜負平生志  
憶苦當年馬少游

孤劍 霜吹 兩鬢の秋  
鞍に抛りて何ぞ復た封侯を為さん  
老來 辜負す 平生の志  
苦に憶ふ 当年の馬少游

〔其三〕

万里江流片月孤  
南飛雁与白雲俱  
當時非有滄浪曲  
憔悴誰憐楚大夫

万里江流 片月孤なり  
南飛の雁 白雲と俱にす  
當時滄浪の曲有るに非ず  
憔悴 誰か憐れまん 楚大夫

〔其四〕

西風一夕起青蘋  
揺落秋天愁殺人  
空記貞觀太平日  
玄成幸自作良臣

西風 一夕 青蘋起こり  
揺落 秋天 人を愁殺す  
空しく記す 貞觀 太平の日  
玄成幸ひに自ら良臣と作すことを

〔其五〕

一行為吏二十年  
説到前朝更悵然  
莫問桃花源上路

一行 吏と為りてより二十年  
前朝に説き到れば更に悵然たり  
問ふこと莫かれ 桃花源上の路

武陵何必是神仙 武陵何ぞ必ずしも是れ神仙ならん

第一首から第四首までは、各首で一名ずつの古人に自らを比している。第一首は司馬相如で、鳩巢の第三首への応答である。朝廷に仕えていた時分の相如は意を得ていたが、老後は病に伏して、秋の愁いが身に染みるようになったといい、失意の中にある白石自身の状況と重ね合わせている。「茂陵多病日」の句は、杜甫「琴台」（『杜少陵先生詩分類集註』（明曆二年（一六五六）跋刊）卷十六）の第一句「茂陵多病後」（茂陵多病の後）の敷き写しである。

第二首で詠まれるのは漢代の武將、馬援である。『蒙求』（『標題徐狀元補注蒙求』、天和二年（一六八二）刊）卷上「伏波標柱」では、「大志」を抱いた年若い馬援が、「丈夫為志、窮当益堅、老当益壯」（丈夫志を為さんこと、窮しては当に益堅かるべく、老ひては当に益壯なるべし）と、年老いても強い志を持つべきだと語ったとされる。白石は自らの意気揚々とした若かりし頃を馬援になぞらえ、旧來の志に背いたことを嘆く。これも老いと失意の詩である。

第三首では、自らを「楚大夫」すなわち屈原に比している。「滄浪曲」は『楚辭』「漁父」で、漁師が屈原に出会い、「滄浪之水清兮可以濯吾纓、滄浪之水濁兮可以濯吾足」（滄浪の水清まば以て吾が纓を濯ふべく、滄浪の水濁らば以て吾が足を濯ふべし）と歌った曲を指す。頑固なほどまでに純粹に過ぎる屈原に対し、漁師は流れに身を任せるように勧める。だが、白石は今の世に「滄浪曲」が無いこという。狡猾な世渡り上手になることを拒否する意志、また亡き主君の家宣に対する忠誠の誓いとして理解できよう。

第四首では、「玄成」こと貞觀の治に貢献した唐朝の功臣、魏徵に自身をなぞらえる。魏徵の詩「述懷」（『唐詩訓解』卷一）には、「深懷国士恩」（深く国士の恩を懷ふ）や、「季布無二諾、侯嬴重一言」（季布二諾無く、侯嬴一言を重んず）とあり、主君に忠誠を尽くす臣下と臣下の進言を大切にする主君の姿が描かれており、家宣と白石が結んでいた君臣の厚い信頼関係を彷彿とさせる。ただ、それはもう過去のもので、今はむなしく思い出されるだけである。

第五首の「前朝」は、家宣が存命であった頃を指す。『折たく柴の記』自序の「前代の御めぐみをうけし事は、よのつねならざりし事をも、おもひしる事もありなむには、忠と孝との道にもたがはざる事もありなまじ」で「前代」と記されるのと同じである。白石が家宣の儒臣となったのは、家宣がまだ甲府藩主であった頃であり、「二十年」は、白石が儒臣として家宣に仕えた期間をいう。それは鶴梁主催の中秋の宴が続いてきた「二十二年」と重なっていた。いつの世も照らし続ける月を眺めながら、家宣に仕えた「二十年」と中秋宴の「二十年」が、感慨深く思い出されたのである。

とはいえ白石は、完全な隠者ないし世捨て人になることを選ばない、と詩の中で表現する。李白は「山中答俗人」(『古文真宝』前編卷中)で、「桃花流水宛然去、别有天地非人間」(桃花流水宛然として去る、別に天地の人間に非ざる有り)と、桃源郷が人間界とは隔絶された別世界であることをいったが、蘇軾は「書王定国所藏煙江疊嶂図王晋卿画」(『古文真宝』前編卷中)で、「桃花流水在人事、武陵豈必皆神仙」(桃花流水人世に在り、武陵のみ豈に必ずしも皆神仙ならんや)と、李白に反論し、「武陵」すなわち桃源郷を、仙界ではなく人間の世にも見出し得ることをいった。白石も第五首の結句で、蘇軾と同じ見解を示している。事実、白石はしばらく幕府に残り、逆風の中であっても、家宣の遺志を継いで貨幣改良などを実現させようとした。鳩巢が、家宣の歿後すぐの正徳二年十一月、すぐに身を引くよう白石に勧めたことを考慮すれば、白石のこの句は、主君を失い、失意の中にあっても、まだ引退しないぞ、という鳩巢への個人的な返答としても解せる。

なお白石が、盛唐詩に加え、蘇軾を含む宋詩をよく学び、作詩に取り入れていたことについては、石本道明氏と池澤一郎氏の論が備わる。<sup>10</sup>ここでは、李白の豪放さと蘇軾の落ち着きがうまく調和し、盛唐詩と宋詩が補完の関係にあるといえよう。また吉川幸次郎氏は、白石連作の第一・三・五首を紹介し、「罷官後の作であろう」とし、享保元年(一七一六)以降の作と推測されているが、以上に検討した通り、実際は罷官前の正徳三年(一七一三)中秋の作と推定される。同氏が第五首の「前朝」を「家宣家継の時代」として解されているのも、正確には家宣の時代である。<sup>11</sup>

## おわりに

本稿では、正徳三年の中秋の宴に際して新井白石が作った五言律詩「癸巳中秋小集」で言及される李白と屈原が、白石や室鳩巢によって如何なる存在として捉えられていたのかを、鳩巢が作った「観白石中秋詩有感五首」を手掛かりとして考察し、白石の次韻詩もあわせて検討した。結果、李白や屈原が、一度は朝廷で仕官し、主君に諫言する立場にあったものの、その後、不幸にも主君の寵愛を失い、朝廷を離れることとなった人物として捉えられていたことが確認された。その背景には、六代將軍家宣の前年の死によって、白石が二十年來の主君を失い、幕府における発言力が著しく低下した実際の状況があった。

鳩巢や白石の詩は、語句の上では盛唐詩の模擬となっているが、その全てが虚構や言葉遊びだけであったのではなく、少なくとも本稿で検討した一連の詩には、家宣の歿後、白石の身にふりかかった現実が投影されている。勿論、詩においては誇張や潤色は多分になされるものである。例えば鳩巢の詩に白石が次韻した連作では、自身の不遇を悲嘆する表現が目立つが、それは一種のポーズである。

しかし、日野龍夫氏が徂徠門における盛唐詩受容を「卓小な現実の自己を放棄し、自己を古人として虚構することができた」、また「現実の遮断」と特徴づけられたのと、本稿で検討した白石・鳩巢による李白受容のあり方との間には、逕庭がある。本稿で検討した白石と鳩巢の詩では、自己を古人に比する場合、それは現実の遮断ではなく、むしろ現実の再認識であり、自己の放棄ではなく、現実世界における自己の生き方を探ることに繋がる側面があった。自身が置かれた現実に、如何に対処し、自らの矜持を保つべきかの指針を提供してくれたのが、作詩という営為を介して得られた時空を超えた知己、つまり李白や屈原などの古人たちであり、太陽と月と並んで後世を照らし続ける彼らの言葉であった。

修身とも関係し得る白石や鳩巢の詩作は、確かに道義的である。朱子学との関連でいえば、朱熹の『楚辞』理解が盛唐詩

の受容・模擬に作用している。しかし、本稿で取り上げた詩の中で形成される理想の儒臣像は、抽象的な道德概念から演繹されたのではなく、歴史上の人物の具体的な経歴や生き様の上に求められ、徳川幕府に仕える自身たちの模範とされた。木門の詩は膨大な量があり、徂徠門の盛唐詩受容との比較も容易ではない。ただ、少なくとも鳩巢と白石による盛唐詩受容の一部分において、唐朝以前の朝廷に仕えた文臣・儒臣に対する人物褒貶を軸とした伝記的・歴史的な関心が作用していたことは指摘できるであろう。今後、鳩巢・白石の詩の更なる検討と、木門の中でも、鳩巢・白石とはやや系統を異にする祇園南海や、徂徠一門による盛唐詩受容との比較が俟たれる。

## 【注】

- (1) 杉下元明「『室新詩評』考」(初出一九九四年、同氏『江戸漢詩―影響と変容の系譜』(ぺりかん社、二〇〇四年)、八七頁)。
- (2) 同前、同頁。
- (3) 掛斐高「風雅論―江戸期朱子学における古典主義詩論の成立」(初出一九九四年、同氏『江戸詩歌論』(汲古書院、一九九八年)、五五頁)。
- (4) 原念斎『先哲叢談』(文化十三年(一八一六)刊)卷三・木下順庵第三条。岩崎遵成『徂徠研究』(関書院、一九三四年)、三五頁に引用あり。
- (5) 青地麗沢『可観小説』卷七「白石、伊藤仁斎の学を評す」(日置謙編『加越能叢書』第二卷(金沢文化協会、一九三六年)、六四頁)。
- (6) 拙稿「室鳩巢の辺塞詩―盛唐詩の模倣と忠臣像の造形」(『語文』第百八輯、二〇一七年)。
- (7) 東京大学史料編纂所編『新井白石日記』下、大日本古記録(岩波書店、一九五三年)、一五六頁。『文昭院殿御実紀』卷十五(黒板勝美・国史大系編修会編『徳川実紀』第七篇、国史大系第四十四卷(吉川弘文館、一九六五年)、二四八頁)。
- (8) 『折たく柴の記』の引用は、松村明校注『折たく柴の記』(『戴恩記・折たく柴の記・蘭東事始』日本古典文学大系九五(岩波書店、一九六四年)、一五〇、三三三、三三六、三五二頁)に拠る。
- (9) 宮崎道生『定本折たく柴の記釈義』(至文堂、一九六四年)、五六〇頁。「正徳二年壬申鳩巢与白石先生諫書」(『新井白石全集』第六卷(吉川半七、一九〇七年)、七二〇―七二二頁)。
- (10) 石本道明「詩人白石小論―詩を論ずる前提となる諸問題」(『季刊日本思想史』第四六号、一九九五年)。池澤一郎「新井白石と宋詩―

白石漢詩における蘇軾・唐庚・王安石の影響」(『明治大学教養論集』第三二七号、一九九九年)。池澤一郎「若き日の白石―新井白石と宋詩」(『新井白石』日本漢詩人選集五〔研文出版、二〇〇一年〕)。

(11) 吉川幸次郎「新井白石逸事その二」『鳳鳥不至』(初出一九六九年、『吉川幸次郎全集』第二十三卷〔筑摩書房、一九七六年〕、二二―二二二頁)。

(12) 日野龍夫「壺中の天―服部南郭の詩境」(同氏『江戸人とユートピア』〔岩波書店、二〇〇四年、初版一九七七年〕、一七〇―一七二頁)。

〔付記〕

本稿は、第六十二回国際東方学者会議(二〇一七年五月十九日)における口頭発表に基づくものです。席上で御教示を頂いた諸先生方に深謝申し上げます。

【キーワード】・室鳩巢 ・新井白石 ・徳川家宣 ・李白 ・屈原